



「少年と自転車」

—ただ、一緒にいてくれたら、それだけでいい—

●ストーリー

11歳のシリル（トマ・ドレ）は、施設で暮らす少年だ。父親と暮らしたくて、かつて父と住んだアパートに施設から電話をするが、その番号はもう使われていない。学校に行くふりをしてアパートに行くが、そこはもぬけの殻だった。「パパが買ってくれた自転車」もない。「盗まれた」とシリルは思う。しかし、シリルを探しに来た施設の職員に追われて逃げ込んだ診療所で偶然に出会ったサマンサという美容師が、事情を知り、人手に渡っていたシリルの自転車を買い戻し、親切にも持つて来てくれる。実際は父親が売り飛ばしていたことが分かる。シリルは帰ろうとするサマンサを呼び止めて頼み込んだ。「週末だけ僕の里親になってくれない？」

独身のサマンサは「私でよければ」と、気軽に引き受ける。施設の院長も同意した。それから、週日は施設から学校に通い、週末はサマンサのところで生活するパターンが始まる。サマンサと一緒に父を探し出し、仕事のレストランまで会いに来たシリルに、若い父親は「お金がないから、めんどうは見れない」とすげない返事をする。不思議なことにこの映画に母親の陰はどこにも出てこない。

それでもシリルは、サマンサを肉親のように慕い、うまくいくよ



うに思われたが、事はそう簡単には運ばなかった……。

●お勧めの理由

本編はベルギー・フランス・イタリアの合作映画だが、元となった話は日本発の公式サイトによれば、それは来日中のダルデンヌ監督が日本人弁護士から聞いた実話を発している。ある施設で暮らす少年に、親は何ヶ月かに一度会いに行く約束したが、結局来なかった。少年は屋根にのぼって父親が来るのをずっと待った。しかし10歳になる頃、屋根にのぼることも親を待つこともやめ、誰も信じなくなつたのだという。

現実には若い独身女性が里親をするケースは少ないのだから、里子の扱いに苦勞する様子はリアルに描かれる。サマンサの経営する美容院の水道の蛇口を開き水を無駄に流し続けて、何度注意されてもやめないシリル。実の父から「お前には電話もしたくない」と言い渡されて、うつぶんの吐き出し場がなく、激しく自分を傷つけるシリル。彼を抱き寄せるサマンサ。サマンサの言いつけを守らずに、夜中に逃げ出してしまうシリル。実の親と暮らせないさみしさを訴えるすべさえ持たない児童。身寄りのない子を犯罪に巻き込もうとする闇の世界。似たような話はあちこちに転がっているはずだ。

サマンサは特に里親をしようと自ら志したわけでもなく、天使のような人として描かれているわけでもない。どこにもいる市民である。だからこそ、シリルと並んでサイクリングに出かけるサマンサ

の姿に、親と暮らせない子どもに寄り添う普通の大人の存在意義がうかがいられる。

●性的シーン

夜中にサマンサの部屋に行ったシリルの目に、ベッドに休んでいるサマンサと同居人男性の裸の上半身の背が見える。

●暴力シーン

シリルが見も知らぬ人にバットで殴り掛かってお金を奪い取る。気を失う程度のダメージではあるが。

●里親について

実の親を離れ施設で暮らす児童には様々な行動障害が現れることがあるらしい。子どもには家庭でしか得られないものがきつとあるのだろう。里親の活動に関心のある方は、近くの市役所や児童相談所に問い合わせみてはいかがだろうか。（評者・前島常郎）



2011年 ベルギー・フランス・イタリア合作
監督◆ジャン・ピエール&リュック・ダルデンヌ
出演◆セシル・ドゥ・フランス、トマ・ドレ
2012年10月5日DVD発売予定 角川書店